

第2回 国際博覧会大阪誘致構想検討会概要

(開催要領)

1 開催日時：平成27年6月8日 9時30分から11時

2 場 所：大阪府庁本館5階 特別会議室大

3 出席委員等

<行政>

植田 大阪府副知事

宮崎 和泉市副市長

保井 岬町まちづくり戦略室長兼町長公室長

山本 大阪府政策企画室政策調整担当部長

澤田 堺市市長公室長企画部長

<経済界>

児玉 大阪商工会議所 常務理事・事務局長

出野 関西経済連合会 常務理事・事務局長

與口 関西経済同友会 企画調査部課長

<有識者>

佐野 国際日本文化研究センター准教授

田口 情報通信研究機構 脳情報通信融合研究センター副研究センター長

中牧 国立民族学博物館 名誉教授、吹田市立博物館 館長

橋爪 大阪府立大学特別教授、21世紀科学研究機関観光産業戦略研究所 所長

山崎 株式会社 studio-L 代表取締役、東北芸術工科大学教授

(議事次第)

1 開 会

2 議 事

(1) 国際博覧会の開催意義、テーマについて

- ・委員からのプレゼンテーション
- ・有識者等からのヒアリング概要（中間報告）
- ・意見交換

(2) 報告事項

3 閉 会

(配付資料)

- 資料 1 中牧委員提出資料
- 資料 2 田口委員提出資料
- 資料 3 佐野委員提出資料
- 資料 4 山崎委員提出資料
- 資料 5 有識者等ヒアリング調査結果概要 (中間報告)

- 参考資料 1 府民・企業アンケート項目 (案)
- 参考資料 2 2005 年日本国際博覧会 (愛知万博) 関係資料
- 参考資料 3 大阪・関西の将来像関係資料
- 参考資料 4 第 1 回国際博覧会大阪誘致構想検討会概要

(概要)

1 開会

2 議事

議題 1 国際博覧会の開催意義・テーマについて

- ・ 4 名の有識者委員から、「今、なぜ万博なのか」、「なぜ、大阪なのか」という開催意義と、大阪から世界に向けてどのようなメッセージを発信できるのかというテーマについて、プレゼンテーションを実施。

資料 1 中牧委員提出資料

資料 2 田口委員提出資料

資料 3 佐野委員提出資料

資料 4 山崎委員提出資料

- ・ 引き続き、大阪府が昨年度から実施している有識者等からのヒアリングの結果概要について、中間報告を実施。

資料 5 有識者等ヒアリング調査結果概要 (中間報告)

- ・ その後、意見交換を実施。委員からのプレゼンテーション概要と意見交換の内容は以下の通り。

<委員からのプレゼンテーション概要>

○中牧委員

まず、「今、なぜ万博について考える必要があるのか」。1つは、万博は、大阪で開催されるにしても、国が開催国として中心となるわけであり、「日本にとってどのような意義があるか」ということを考えなければならない。

1851年のロンドン万博から始まって、19世紀は科学技術の発展ということを中心に万博は行われていた。万博の中では賞が授与されて、それがビジネスに繋がるというようなものであった。

20世紀に入ると、特に国威発揚が問題になったが、次第に問題解決型の万博へと移ってきている。例えば、愛知万博は、自然環境を考えるという意味で開催をされた。それは上海万博では必ずしも受け継がれなかったということはあるが、大きな流れとしては、やはり地球全体の問題を考え、その解決の糸口を探ることが大きなウエイトを占めるようになってきている。

同時に、かつての科学技術を謳歌する万博から、精神文化の復権を図るという万博となってきている。愛知万博では「叡智」、2020年のドバイでは、「ここをつなぐ」と表現されるような価値が芽生えてきている。

また、高度成長をバックに経済発展を図るという万博のスタイルが続く一方で、格差の是正、例えば、環境対策や社会的なアンバランスといったものの是正のための対策を掲げるものが出されてきている。

3つの流れを説明したが、日本がもし開催するとしたら、成熟した社会としての日本で開催するという意義を探っていく必要があるのではないかと。もはや国威発揚、科学技術の謳歌、経済発展ではなく、精神文化も含めた成熟した社会のあるべき未来像のようなものが重要なテーマになってくると、私は考えている。

そういう中で、「なぜ、大阪で行われる必要があるのか」。70年万博は、テーマは「人類の進歩と調和」であり、国威発揚、科学の振興、経済的発展という目的に沿った万博であった。確かに「進歩」の方は、その後の展開からみても、かなりの部分が実現できた。一方、「調和」に関してはどうかというと、私の職場であった国立民族博物館が、ある意味、「調和」というテーマを引き継いでいるが、必ずしも十分に開花しているわけではなく、積み残した課題ではないかと思う。

70年万博は、大阪が経済発展をし、公害となどの問題の解決に乗り出していく中で、「大阪万博によって地域が振興された」というよりは、大阪都市圏における地域発展の「追い風」になったのが、大阪万博だったと考えている。

いきなり「福神」という福の神の話をここで持ち出すのが、日文研所長の小松和彦さんによると、貧乏人ではなく、すでにリッチな長者の屋敷に行って、飲み食いをして景気づけを行うのがプロトタイプの福神だという。すでに豊かな家に行って、あおるのであり、そういう意味では、まさに「福神」の役割を果たしているのが万博ではな

いかと考えている。

万博を55年後に開催するとしたら、それは「追い風」であり、半世紀に1回は、地域の経済振興や文化的な発展ということを十分に講じた上で、それらの「追い風」となるものが必要なのではないかと考えている。

その意味では、大阪だけではなく、関西の地域連携ということが非常に重要だと思う。「東の筑波、西のけいはんな」として構想された国際文化学術研究都市には、研究施設などは十分に建っているが、名前に入っている「文化」の施設が非常に希薄だ。以前、大平内閣の時に、国策として文化首都を関西地域につくっていくという構想があったが、現代の新しい「総国分寺」を関西に建てて、地方に「国分寺」、「国分尼寺」を造って文化の振興を図ったり、国家の発展をそこで構想するというようなことを、もう一度考えてもいいのではないかと。そうしたことが、国内における地域格差というものをも是正していく政策につながるのではないかと。

3番目は「参加国として意義」。万博は日本だけが参加するわけではなく、各国が参加して万博を作るということが、非常に重要な点である。

現況を見ると、アメリカは、連邦政府として万博を支援することはやっておらず、企業のスポンサーを得て、パビリオンを作るということになっている。他方で、中国が台頭しており、熱心に上海万博以降、国内博覧会を実施している。習近平さんは、陸のシルクロードと海のシルクロードを繋ぐ「一帯一路」政策をとっており、中国を中心とした構図ができつつある。このことは、上海万博で、アフリカ50か国を招くとともに、中央アジアなどの国々にも参加を求めて開催していたことから、よくわかる。今後、例えば、ロッテルダムなどの都市が万博開催に向けてエントリーしてきたときに、開催都市決定の投票において、中国と中国に関係の深い国々がどの都市の支持にまわるかということをも十分に考えておかないといけないと、ある識者がいっていた。

一方、ヨーロッパは成熟社会であるので、どこに焦点を当てていくかだが、ミラノでは「食」に焦点をあてた。

日本だったらどうなのか。私が考えているのは、長寿、健康、快適だ。これらの面で日本は、最先端でいろんな課題に直面していくことになるので、これらの面を整備すると、そこに「福の神」がやってくるのではないかと。

もちろん日本列島は、災害や格差の問題も抱えおり、これらは足をひっぱる「貧乏神」であるので、そうしたマイナスを回復することが重要となる。「福の神」の方はどんどんプラスに推し進めていく。万博は、これらのマイナスとプラスの面を考えながら展開をしていくものだろうと思う。

成熟社会としては、「衣食足りて礼節を知る」、梅棹忠夫さんの表現である「腹の足しより心の足し」、経済よりは文化というようなことを課題にしていくのが望ましいと考えるので、最後に、進化と調和ではなくて、例えば「人類の長寿と調和」というテーマを提案しておきたい。

○田口委員

まずは最初に、「今、なぜ万博なのか」。21世紀に入って、経済や社会が随分変わってきているが、これに対応した人間、あるいは国の新しい社会像・生活像というのが、まだ十分には提示されていないというのが問題意識だ。これをモデルや解決策として提示することは、21世紀の万博として意義があるのではないかと思う。そのためには、産業界などの積極的な参画で、実際に「もの」や「システム」として見せていかなければいけないと考えている。

大阪万博は、どちらかというと科学技術中心だったが、やはり、これからの生活や社会などを考える上では、単なる理科学的な科学技術だけでなく、心や精神、文化の問題なども重要なので人文科学系の考え方を十分に取り入れる必要があるだろう。こういう課題に対して、総合的に力を持っているのはやはり日本であるので、2025年、あるいはもう少し先かもしれないが、この時期に日本として提示する意義があると思っている。

では、「21世紀の課題とは何なのか」。資料で20世紀の課題と21世紀の課題について、私なりの考えをまとめている。例えば、「エネルギー」は愛知万博でやっているし、ドバイでは「心」ということだが、21世紀は、「超高齢化社会」が大きな課題となる。年齢間格差とも言い換えられるので、いろんな「格差の問題」や「宗教の対立」などまで含めて21世紀らしい社会像を課題にすることができると考えている。具体的な課題についてはあとで話をしたい。

次に、「なぜ、大阪なのか」。歴史を考えると、特に江戸時代には、皆さんご存じのとおり、大阪では庶民の文化が早くから発達していた。その伝統が今もまだ実際に生活の中にしみ込んだ形で大阪に十分残っている。それが21世紀的な「楽しい社会像」に十分に生かせる。例えば、お笑いや文楽。文楽などは、単に高尚な文化ということではなく、庶民がお弁当持って1日遊ぶような施設が江戸時代にできていた。そういう文化の根付いた地で万博を開催するということには、意義があると思う。

単にそうした文化だけではなくて、幅広い産業がバックにあるということは、大阪の特徴であり、産業界、自治体、学術機関の大規模な連携が可能である点も関西の特徴だと思っている。そういうメリットを生かして、21世紀型の社会において、より人間にフィットして、一人一人の個人が楽しく生活でき、お互いに連携して、うまくコミュニケーションのできる生活のスタイルやそれを支える社会のシステムを提示する万博を大阪から提案できるのではないか。個々の会社が自分の製品はすごいだろうということではなくて、そういうものも組み込んだトータルとしての社会、あるいはトータルとしての街などを実際に提示することができ、例えば、来た人が何日間か住んでみて、「こういう街だったらいいな」とかいうことを感じていただけるような万博も提案することができるのではないかと考えている。

キャッチフレーズとしては、例えば、「楽しいエイジレス社会」。「高齢化」というとネガティブな印象があるので、年齢に関係なく、若い時も歳をとってからでも楽しく過ごせる社会、あるいは産業技術などに支えられたそのような社会とはこんなものですよというものを提示する。もちろん、高齢者だけではなく、若い人においても今、雇用の問題などもあるので、早くから社会に参画して、閉じこもらずに社会の中で楽しく生きることのできる、あるいは男女の差別なく生きることのできる、そういう社会にするにはどうしたらいいかという答えを提示できたらいいのではないかと思っている。

資料では、「楽しいエイジレス社会」を実現するために必要な分野をまとめている。社会参画や、例えば、歳とった方などの移動の自由をどう保障するか。また、健康増進や生活支援も大事だし、少し強調するとしたら、「こころの安定」というものをサポートできるような技術やシステムをきちんと提示できたらいい。資料には、それを支える技術について、具体例を書いてみたが、こうしたものは関西の企業や日本の企業が得意なところであるので、大いに産業界の力を発揮できるのではないか。それらが、個々の成果発表ではなくて、システム的な街づくり、あるいは社会づくりの提案であったら、日本あるいは大阪で開催する意義があるのではないかと考えている。

資料の最後は、私の職場で行っている研究を紹介したもの。センターでは、脳の研究をしているので、これらの技術の一部をお手伝いができるのではないかと考えている。

○佐野委員

万博は世界最大の公式イベントであるが、今日では、一見これと同じように見える大規模イベントが他にもいろいろある。

例えば、民間で行われる各種の見本市、地方博覧会というものが全国各地で開催されており、日本では、たまにしか開催されない万博に比べると、皆さんのイメージがわかりやすいかもしれない。しかし、地方博覧会は、地方自治体がかかわっているという意味で公的な催しだが、それ以上の決まりごとはなく、グローバルなレベルのものではない。万博とは異なるものだ。

形態がやや万博に似ているものとして、国際美術展がある。広い敷地を取って国ごとにパビリオンを建てるといったようなことも行われるなど万博と似たところもあるが、これは芸術、特に美術の分野に特化した祭典であり、国際的な統一制度のもとで認可されて行うものではない。

制度面で似ているとすれば、オリンピックがある。しかしこれは開催期間が集中的で短く、限られたエリート選手の活躍を主にテレビで観戦するという種類のものである。それに対して、万博は、広い敷地に世界各国のパビリオンを建てて、人間と人間の交流、生の体験の積み重ねが半年間続くという意味で、規模も意義も全く違う。

こうしたすべての角度からみて、万博とは、今日もなお世界最大の唯一の公的な国際イベントであるといつて間違いない。その帰結はなんなのかという、万国博覧会というものを主催する国は、世界に向かって自らの描く未来像、世界の未来について公的にメッセージを投げかけ、それを公的に歴史に刻むことができるということであると思う。今日、「国際社会で日本が相応の役割を果たす」とすれば、他のどんな手段をもってするよりも、平和的な万国博覧会を通じてすることには意味があるし、ふさわしくもある。万博を開催しようとするかどうかの決断に当たり、万博を行うことの価値はここにあるかと考えている。

こうした前提にたつて、私からのテーマに関する提案は、『いのち』だ。

今、勤務先の研究所で国内外の第一線で活躍している万博研究者の方々や博覧会の現場の専門家の方々に集まっていただき、万国博覧会の共同研究を行っている。そこで大阪の万博構想についてのブレインストーミングをした際にも、この『いのち』というテーマは、日本の強みである生命科学に焦点を当てることができ、また関西にその知識が集結しているという意味でも非常によいという意見がでたが、それだけにとどまらず、『いのち』というテーマのもとでは、現代の世界の喫緊の課題である「気候変動」や「生物多様性」の問題にもアプローチすることができる。

また、異文化理解、他者との共生も射程に入ってくる。イスラム国などの問題に象徴されるように、他者を理解し、共生するということは、今や文化交流ができれば楽しいといった話ではなく、まさに生存に直結する、我々の命の問題になってきている。

そういった観点も踏まえて、自然環境だけではなく文化的環境も含めた、人間の生きる最も広い意味での環境について、『いのち』の問題として考えるというのが、私が提案するテーマの意味だ。

文化的環境とは、日々の暮らしの中で、『いのち』にどう花を咲かせるかという問題だ。こうした問題であるからこそ、日本から世界にメッセージを発するのであれば、東京発のおかみの声でない、多様な民の声として大阪から世界へ届けることに意味があると思う。大阪で万博を検討する際、「大阪の声をどう世界へ伝えるか」ということに視点が向きがちであるが、そこに留まるのではなくて、歴史的な民の都である大阪が、「日本中の多様な声を巻き込んで盛り上げていく」という心意気で推進していただきたい。それは、大阪という、東京と拮抗しながらも歴史的な性格の違う都市だからできることであり、別の言い方をすれば、「大阪のある日本だからこそできる」ことではないかと思う。東京一極集中という言い方をよく聞かすが、ロンドン、パリの一極集中とは全く違う。これらのような、本当にそれ以外にはない一極集中の国々にはできないことが、日本にはできる。西から日本を牽引する大阪から、歴史的に多極構造なしていた「日本の国のかたち」というものを世界に知らしめるべきではないか。もし万博を提案し、主催するならば、日本の他の都市ではなく、第二の都市、東京に拮抗する都市である大阪でないといけないと思う。

万博とは、国単位で主催する国際社会の祭典である。その都市がどんなに周到に考え、

やる気を持って立ち上がったとしても、その都市が立ち上がることの国としてのかたちが見えてこないのだ。もちろん大阪独自のメリット、デメリットについては地元として十分な計算が必要だが、私がここで申しあげたいのは、「大阪が立ち上がる」ということが、日本の国として、そして国際社会としての意味があるということだ。その上で、地元としてそれをどう受けとめるかということを考えていただければと思っている。

最後に、大阪で万博を開催する場合、私が提案したいのは、『懐徳堂のまちがつくる万博』。大阪は、町人たちが自主的にお金を出し合って知的対話の場を作り、お互いに意見交換をして勉強しあう先進的な知的サロンを形成したことで知られている。大阪でのそうした民間知識の集積は世界に冠たるものであったということが、江戸時代の研究でも解き明かされてきている。

こうした大阪の特性と、実体験の場であるという万博の素晴らしさを掛け合わせてみると、大阪が提示できる万博の形というものが見えてくる。実物の展示ということだけではなく、対話の実体験を積み重ねる場として、21世紀が欲する新しい万博のスタイルを提案できるのではないか。

一つは、準備の段階から、万博をどう考えるかという対話の場をどんどん設けていくということ。それから、会期中には、会場内外で大小さまざまな対話の場を設定していく。例えば各パビリオンに、それぞれの特徴を生かして「直接対話のイベントをどんどんやってください」と義務づけることもできると思うし、主催者側のイベントとしてもやる。さらには、最先端技術によって万博会場と日本各地、そして世界の隅々を常時対話で結んでしまうような仕組みも実現できるのではないか。会場に来られない人も居ながらにして万博に参加させてしまうような対話の仕組みを作る。その時点での技術ならできるんじゃないか。万博会場から大阪の街へ、大阪から日本、世界の各地へと溢れ出すような万博のあり方を追求してはどうか。

万博は19世紀に、巨大な会場を作り、その中に世界の物産を展示する、いわば、「ひとつ屋根の下に世界を収める箱庭」として始まった。これからは、地球の大きさをそのままに、まるごと繋いでしまう、そのハブとしての万博。そういう交流の一大場面にするということであれば、これからの世界に、なお万博は必要なものとして注目されると思う。懐徳堂の大阪から「21世紀型の対話の姿」として、そうしたものを世界に提示してはどうかというのが私の提案だ。

○山崎委員

資料5「有識者ヒアリング調査結果概要（中間報告）」で、「いいな」と思う内容がたくさんあったので、それを紹介しながらお話ししたい。

私は、元々建築とか庭園の設計をやっていたが、専門家が頑張っていて考えて提案すればするほど市民がお客さんになってしまうという状態をどうしたらいいんだろうと思ったことから、10年前に「studio - L」という事務所を立ち上げた。専門家として

「こうしましょう」というよりは、住民の中に入り、「あなたたちどうしたいのですか？」と話を聞きに行く者がいてもいいのではないかと考え、「一緒にやりましょう」と話をし、活動を実際にしてもらおう「コミュニティデザイン」を仕事にした。

21世紀の万博をやるとすれば、専門家が「こんな未来はすごいですよ」ということを「そうですか」「それは違うだろ」と、住民がただ傍観者として意見や文句を言うだけではなく、「大阪府民・関西の方々、あなたたち自身が示せることがありますか」というようなことを、万博を契機として設定できればいいのではないかと。

ワークショップや話し合いの場で、私がよく感じてきたのは、正しいことだけ話していても参加する人は一定規模に収まってしまい、参加者が増えない。「正しい」だけではなく、「楽しい」とか「美しい」ということがないと人は来ないだろうということだ。万博には、「美しさ」や「楽しさ」、「わくわくする気持ち」を生み出す力がある。今までとは違った「住民の主体性を作る場」になり得るのではないかと。佐野委員がおっしゃっていたように、大阪は「民都」であり、東京でやるのとは少し違う、大阪府民や関西の人たちの力をうまく使っていける場になるのではないかと考えている。

資料5の「【1】今、なぜ万博なのか」。(1)の二つ目の○に、「2025年には、ほぼ3人に1人が高齢者になる。日本は世界一の高齢社会となり、だれもが経験したことのない時代を迎える」とあるが、まさに日本から発信できることは、田口委員がおっしゃっていたような「楽しいエージレス社会」。高齢社会の中において、どういうことをみせられるのかを大阪、日本で開催する意義と設定していいのではないかとと思う。

そして同じ資料5の「【2】今、なぜ大阪なのか」4ページに、(2)地域住民の参加意識を向上させるとある。「大事なことは、これから企画される万博が、地域住民にとってどういうことなのか」ということであり、その下の部分には、「愛知万博では地元の人がすごくボランティアをして、愛知県の医療費が一時的に下がった」とあるが、一時的というのはいらない。万博が終わった後も、みんながまちづくりに参加し続けて、そして医療費が下がっていくということになればいい。

石川善樹さんの本によると、医療の最先端の分野では「友だちの数で寿命がきまる」という結果が出ているとのことだ。本によると、「孤独は喫煙より体に悪い」、「作り笑いでも寿命は2年延びる」という研究結果も出ており、禁煙しないで友だちをつくった方が寿命が延び、また、作り笑いでも寿命が2年延びるということだから、本気で笑ったらきっともっと延びる。スマホなどで「今度ご飯食べに行きましょう(笑)」では送信するときに全く笑っていないのでダメ。むしろ万博で、準備の段階から対話をして、そこで悩んだり、議論したり、笑ったりしながら、万博という機会を一生懸命やっていたら、「医療費が下がっていた」ということになるかもしれない。

田口委員がおっしゃっていたような最先端の医療や、脳科学の分野から人間の生活をサポートするような技術を世界に対して発信することも、先進国であり、高齢社会

である日本ができることではあるが、同時に、そこにがんがん住民の人たちが参加しており、「この人たち、なんか健康そうだね」、「幸せそうだね」、「笑っているね」というようなことを大阪から示すことができるのではないかと考えている。

5 ページ目には「(4) 健康寿命の延伸、医療」とある。「関西の高齢化のスピードが全国平均よりもあがっている」ということ。これは都市においてだが、「老いる関西」、「エイジングソサエティー」ということを逆手にとって、「超高齢社会を豊かに生きていくために何が必要か」ということを、技術面からとともに、対話の面、精神面、文化の面からも大阪から発信することできたらいいのではないかと思った。

具体的にどんなことかということ、資料4の『しまのわ 2014』を例に紹介させていただく。去年、広島県知事と愛媛県知事が「瀬戸内海を挟んで、博覧会みたいなものをやりたい」とおっしゃったので、有名な人で数万人集めましたというようなことをやるのもいいけれど、島にはキャラの濃いおっちゃんやおばちゃんが多くいるので、その人たちが、東京や大阪から来た人たちに何かを提供していくということができたらいいのではないかという提案をした。半年くらいで「百万人以上は絶対、集めてくれ」と言われ、結果は超えたが、「そこでみんなが何を得たのか」、「どんな気持ちになってみんながやる気になって帰ってくれたのか」の質の方が大事だと思っていたので「百万人超えるかどうかわかりません」と言いながらやらせていただいた。私たちが重要だと思っていたのは、民間の人たちが企画するイベントだ。市町をいろいろまわって、市民の人たちに「一緒にやりましょう」と呼びかけたら、170のチームができあがった。この人たちが「しまのわ」が終わった後も「その活動を続けたい」となるよう、1年間皆さんと対話を続けてきた。「打ち上げ花火しないでください」、「今回企画したものをまちづくりの活動で続けて、しまのわが終わった後もその人たちが活動するようにしてほしい」と支援した。わかりやすくつながりを作るとか、ワークショップなどを繰り返した。ここでも「楽しい」や「美しい」ということが大事だということを実感した。

その中から2つだけ紹介させていただく。ひとつは「おかんアート美術館」。おばちゃん4人がやってきて「まち歩きをやりたい」と。「まち歩きいいじゃないですか。何か問題ありますか?」と言ったら、「トイレがない」と。「どうするんですか?」と聞いたら「うちのトイレだったら使ってくれてもいいよ」とおっしゃるので、「じゃあ、見せてください」と言って見せてもらったら、家の中に手作りのおかんアートがたくさんある。「あなたの家を1週間限定の美術館にしましょう」と言って、この人の家を1週間限定でおかんアート美術館にした。おかんたちは「1週間で10人も来ない」と言っていたが、お土産を渡したり、説明したりとしていたところ、7日間で800人が来た。1日100人以上が人の家に上り込むみたいなことになった。これはおばちゃんたちも驚いていたが、無回答以外は全員が「満足した」と回答するなど、来た人たちの満足度がものすごく高かった。業者がやっていることであれば文句でも言ってみようかという感じになるが、「私と同じ市民が、私を迎え入れてくれている」

という関係は、違う関係性を作るんだということが分かった。みんなお礼を言いながら、「ありがとう」と「今度、私もやろうかな」というような話になっていたのが象徴的だった。

もう一つは、「狼煙を上げたい」というおっちゃんが狼煙を上げていたら、向かいの島からものろしが上がるようになってきて、だんだん だんだん狼煙が繋がるようになった。結局 57 か所、広島県と愛媛県と、頼んでないのに山口県でも上がるようになり、NHK が空撮して夕方のニュースになった。そんなことをやる人たちが繋がっていった。

「地域の住民がどういうことで繋がっていくのか」というのは、きっかけはいろいろある。今回、ご紹介した取組みの一つ一つは取るに足らないものだが、広島と愛媛で 100 も 200 もの取組みができたわけだから、「大阪だったら、どれだけこんな団体がいるんだろう」と想像すると、万博を契機に、こうした人たちが繋がって、万博が終わった後のまちづくりの力にもなってくれるとなれば、ひとつのレガシーをつくることになるのではないかと思った。

<意見交換>

○出野委員

様々な主体の共感を得るということが、まず第 1 歩であり、そういう意味で、今日、ご提案いただいた意義やメッセージは、最優先のことであろうと感じた。私自身の視点を大きく広げていただいた話を多くお聞かせいただいた。

あわせて、こうした意義などを具体化していくスキームなどで、今日も少しでいたが、地域の主体的な参加や対話、あるいは調和や連携といったものをどういう形で打ち出せるかということも共感・共鳴を得る大きな要素のひとつとなると思うので、この辺もあわせて、考えていただきたい。

最後に経済界としては、万博開催後の効果も含めて、経済活動の追い風となるようなグランドデザインがあり、その中に万博を位置づけることによって、より経済活動の主体者が参加しやすくなると思うので、そういう視点も含めて、ご議論いただきたい。

○児玉委員

民が主体的に動くことで「わくわく感」がでてくるということや、山崎委員が言われたような、押しつけではない草の根から湧き上がってくるようなものが非常に重要であるということはその通りである。お上からの押し付けではないということが非常に重要だと思った。

経済界はどうかというと、「腹の足しよりも心の足し」という話があったが、経済界の現状では、「腹の足し」の方が、気になるところである。

資料5の4ページの二つ目のマルで、「万博という枠組みをつけない場合でも展開はできる」という意見があるが、ひとつの方向としては、そうしたことも考えられると思う。

大阪がどう成長していくかという成長戦略の中で、「大阪がめざすべき都市像を実現していくために、万博がなぜいるのか」という部分がきちっと議論されていないと、民から湧き上がるような思いがでてこないだろう。経済界も腑に落ち、理解して動くということにつながっていかないと思う。

大阪でやるべきこととして、MAICEやカジノなど、いろいろなものが提案される中で、なぜ万博がいるのかという議論を十分にしておかないといけないと思う。

○與口委員

70年代は、新幹線、オリンピック、70年万博という流れがあったが、今回も、リニア、2020年にオリンピック、次に万博という流れであり、パーツ的には70年代と同じである。70年万博が終わってからの谷の落ち込みが、大阪の衰退の原因であることから、万博をやるだけでなく、「あとに何を残せるか」、「レガシーをどう残すのか」が非常に大事だと考えている。2025年がゴールでなくて、スタートであり、その後どうするのか、その仕掛けについて、今、同友会において問題意識をもっているところである。

そういう意味で、コンセプトを固めていく議論と、大阪の戦略にどう位置付けていくかという議論をともにしていくことであれば、経営者のみなさんの腹におちるものとなるのではないかと考えている。

中牧委員の資料に、「参加国としての意義」としてアメリカや先進国について記載があるが、アジアの国々は万博に対してどんな気運にあるのか。成熟をコンセプトとした場合、新興国は成長をめざしており、そのあたりとズレがないか。中牧委員にお聞きしたい。

もうひとつは、「エージレス社会」とは、どのように日本語に訳せるのかを田口委員に伺いたい。単に、健康で長寿、若々しく、元気にといいれば、「成熟」とはなかなか重なりにくい部分があるかと思う。

○中牧委員

アジアの新興国が万博にどういうスタンスをとっているかということだが、中東諸国は万博に向けた活動をかなりしている。本年開催のミラノ万博のあとは、ドバイでの開催が決まっている。それから、BRICsの中で、中国が先頭を切って開催し、ブラジルもドバイに負けたものの2020年万博に立候補するなど、同様の流れがあると思う。

○田口委員

もともとの発想の原点は、高齢化社会への対応だが、どんな年齢であっても、社会、コミュニティに参加することを支援できるような社会像とかいうことを、産業技術も含

めて提案できたらいいのではないかということである。

○橋爪座長

アジアでの万博ということでは、2017年開催がカザフスタン、2020年開催がドバイであり、中央アジア、中東での開催が続く形となる。

本日の委員の方々からのご報告と有識者ヒアリング結果報告から、総じていえば、「ライフ」、「ヘルス」といった2つの言葉がしばしば出てきていた。これらは、技術的、科学的な研究の分野でもあり、産業振興の面においても、関西が伸ばす方向でめざしている領域であろうと思う。

国家の政策の中でも、関西でこの分野を重点化するとして、医療特区などの動きがでてきている。関西が医療の分野で世界的な中心地であるということをプレゼンテーションしていくひとつの手段として万博があるのだと、本日の委員意見と報告から、私なりに考えている。

市民のコミットの仕方ということについては、愛知万博の時に、非常に実験的で先進的な取組みがNPOも参加して行われた。その際、これからの万博では市民参加を重点化していこうというメッセージが出されたが、その後の万博では、愛知万博のときほどの盛り上がりは継承されていないと思う。

スペインのサラゴサ万博（2008年）は川の博覧会、韓国のヨス万博（2012年）は海の博覧会、カザフスタンのアスタナ万博（2017年）がエネルギー問題を主題とした博覧会であり、水資源や海洋資源、また資源の面などから、持続可能な開発に対して問題提起がなされている。この大きな流れから考えると万博は、持続可能性、すなわち地球全体における大きな意味での「いのち」の問題を考える場となっている。また、いわゆる市民参加についても人とつながるということで、「いのち」の問題が重要になるという印象も受けたことを、付け加えておきたい。

議題2 報告事項

- ・ 参考資料1と2について、事務局から説明を行った。

参考資料1 府民・企業アンケート項目（案）

参考資料2 2005年日本国際博覧会（愛知万博）関係資料

3 閉会（終了）